

## 日独イディオム比較・対照

— “Mund”と「口」を構成要素とするイディオム表現 —

植 田 康 成

【キーワード】日独対照、イディオム、比喩的意味、偽の友達 (Falsche Freunde)

Zwei Kühe stehen auf der Weide. Die eine macht muh. Darauf die andere: “Du nimmst mir das Wort aus dem Mund.” (Nikol 2002: 108)

(2頭の牛が牧草地にいる。1頭が「モー」と言った。それに対して、もう1頭が言う、「そっくりのことを、ちょうど僕も言おうとしていたところだったのに、先を越されてしまったぞ、モー！」)

### 0 はじめに

「“Zunge”と「舌」を構成要素とするイディオム」に関する日独のイディオム表現を比較・対照した際に述べたが (Ueda 2001)、ドイツ語では“Zunge”が構成要素となっているイディオム表現に、日本語では「口」が対応している場合が少なくないようである。本論文では、その逆の場合、つまりドイツ語では“Mund”を構成要素とするイディオム表現に日本語では「舌」が対応しているものがあるのかどうか、という疑問を出発点に、“Mund”と「口」を構成要素とする日独のイディオム表現を比較・対照してみよう。

「“Zunge”と「舌」を構成要素とするイディオム」に関しては、十分に実証的には確認できなかったが、本論文ではイディオム表現に関する語用論的な側面すなわちコノテーションについて、可能な限り日独のイディオム表現を比較・対照してみよう。

### 1 資料源について

本論文における資料源は、ドイツ語に関しては、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992) から“Mund”に関するイディオム表現を拾い上げる。そしてさらにフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966) の“XI. Menschliche Körper” (S. 147-261) の章から、口を構成要素とするイディオム表現を拾い上げる。そしてだぶっているものは省く。結果として合計は61となった (【資料1】)。日本語に関しては『成語林』から「口」を構成要素とするイディオム表現を拾い上げることにした。その総数は82である (【資料2】)。

## 2 資料の分類と分析

### 2.1 ドイツ語における“Mund”を構成要素とするイディオム

#### 2.1.1 統語論的分類

日本語における「口」を構成要素とする82のイディオム表現を一瞥してわかるように、すべてのイディオム表現において主構成要素としての「口」は一度だけ出現している。ドイツ語における“Mund”を構成要素とするイディオム表現においては、“Mund”が2回出現しているものがある。すなわち“von Mund zu Mund gehen”（人から人へと次々に話が広まる）である。また“Mund und Nase aufreißen”（非常に驚く）といったように、2つの名詞が出現しているものが16ある。3つ以上の名詞が出現する表現はない。“Mundwerk”を構成要素とするイディオム表現（46-49）と、“mundgerecht”および“mundtot”を構成要素とするイディオム表現は、“Mund”から派生されたものであるので、データとして取り込んだ<sup>1)</sup>。主構成要素としての“Mund”あるいは“Mundwerk”が主語となっている表現は“jmds. Mundwerk steht nicht still”（絶えずしゃべる）（46）だけである。残りの60の表現においては、すべて、動詞の目的語か前置詞句において前置詞に伴われている。つまり、主格以外の形で出現している。出現している前置詞は、“über”（jmdm. über den Mund fahren(29)）、“von”（von der Hand in den Mund leben(38)）、“zu”（von Mund zu Mund gehen(30)）、“in”（jmdm. etwas in den Mund legen(25)）、“aus”（aus berufenem Mund(34)）、“vor”（kein Blatt vor den Mund nehmen(36)）＝、“um”（jmdm. Honig um den Mund schmieren(40)）、“mit”（mit dem Mund vorneweg sein(27)）、“auf”（nicht auf den Mund gefallen sein(21)）、“an”（an jmds. Mund hängen(20)）、“nach”（jmdm. nach dem Munde reden(28)）の11が確認できる（（ ）の中の表現は一例としてあげてある）。“Mund”が空気や栄養物を体内に取り入れる身体器官であるということから、前置詞“in”が一番多いのは、当然といえようか。その数は12となっている。逆に出す方の“aus”あるいは“von”が同数ぐらいあっても良さそうであるが、そうはなっていない。“aus”は4、“von”は3となっている。

#### 2.1.2 意味論的分類

“Zunge”を構成要素とするイディオムと同じように、身体器官としての“Mund”、つまり空気や食物を身体内に取り込むための器官（a-1）、味覚に関わる機能（a-2）、発言行為に関わる機能（b-1）、発言行為による言語的産物（b-2）という4つの意味論的観点から、61のイディオム表現を分類すると、その結果は次のようになった（分類の詳細については、【資料1】）。すなわち、（a-1）、（a-2）、（b-1）、（b-2）のそれぞれに属するものが14（23%）、2（3%）、17（28%）、28（44%）という数になった。

発言行為およびその結果としての言明、発言に関するイディオム表現が45にものぼっていることが目立つ（ $45 \div 61 = 0.73$ ）。そして味覚に関する機能を意味内容とするイディオム表現が2つ

しかないという結果と考え合わせると、“Mund”を構成要素とするイディオム表現の多くが発言行為に関するものであるということが言える。

次にイディオム表現の主構成要素となっている“Mund”が字義通りの「口」を指示しているのか、換喩的に用いられているのか、あるいは暗喩的に用いられているのか、という点から、分類することができる。たとえば“von Mund zu Mund gehen”（人から人へと広まる）(30)という表現に出てくる“Mund”は、日本語訳が示唆しているように、人を意味しており、換喩的に用いられている。“kein Blatt vor den Mund nehmen”（口の前に葉を取らない）(36)における“Mund”は、字義通りに「口」を意味している。“Mund”が発言行為や発言を意味している場合は、暗喩的であると考えられる。つまり、上で述べた4つの意味論的観点からの分類における(a-1)、(a-2)の2つに分類できるものは、字義通りの意味で用いられていることになる。そして(b-1)、(b-2)に属する表現に出現する“Mund”は、暗喩的に用いられていると考えることができる。

### 2.1.3 語用論的分類

たとえば“Ausdrücke im Munde führen”(33)（ぞんざいな言い方をする、ののしり言葉を用いる）というイディオム表現は、否定的に評価される事態について適用される。あるいはその表現が意味している事柄自体が否定的に評価される。ののしり言葉を使うというのは、一般的には良いこととは見なされていない。それに対して“reinen Mund halten”(11)（口が堅い）という表現は、肯定的な評価を伴っている。こういった価値評価は、表現に伴うコンテキストに関わっているが、そういった表現の使用条件の一部でもある。そのような、いわば語用論的な観点から、61の表現を分類してみると、どうなるであろうか。

1) 表現が意味している事態が肯定的に評価される、あるいは肯定的な価値評価で使われる(+), 2) イディオム表現が意味している事態が否定的に評価される、あるいは否定的な価値評価で使われる(-), 3) そのいずれでもなく中立的(±)、という3つの語用論的観点に従って分類してみた結果、プラス評価を伴う表現は14(23%)、マイナス評価を伴うものは33(54%)、中立的な評価を伴うものは14(23%)となった<sup>2)</sup>。61のイディオム表現ひとつひとつについて、当該の表現が肯定的、否定的、中立的のいずれの価値評価を伴っているかの詳細については、【資料1】をみていただきたい。

分類結果についていうと、発言行為と発言行為による産出物としての発言が肯定的に評価される表現が意外に少ないという感じがする。それに反して、マイナス評価を伴う表現が半数以上の33もあるのが目を引く。

## 2.2 日本語における「口」を構成要素とするイディオム

### 2.2.1 統語論的分類

日本語の「口」を構成要素とするイディオム表現には、すべてにおいて「口」が一度だけ出現

している。主要な構成のタイプを多い順から上げると、1.「口」＋「を」＋「述語」(25)、2.「口」＋「が」＋「述語」(18)、3.「口」＋「に」＋「述語」(10)となる。述語となっているものは、主に動詞と形容詞である。形容詞は「旨い」、「うるさい」、「多い」、「重たい」、「堅い」、「軽い」、「悪い」の6つが確認できる。

「口」が複合語を形成しているものがいくつかある。すなわち、「口裏」、「口数」、「口車」、「口三味線」、「口幅」、「口火」、「口弁慶」、「口頭」、「口吻」といったものである。「口の端」のような「口＋の＋名詞」という形の名詞句が4、それとは逆に「口」があとの方に来る「名詞＋の＋口」という構成が2（狼の口、序の口）、「用言の連体形＋口」という構成が「開いた口」と「あたら口」、「大きな口」、「綺麗な口」、「立派な口」の5つである。「言う口の下から」は、「用言の連体形＋口＋の＋名詞」という複合のタイプである。

### 2.2.2 意味論的分類

まず、前節で確認した形容詞6つのうち、意味そのものが否定的な価値判断を示しているものは、「うるさい」、「悪い」である。「うまい」は本来的には肯定的な価値判断を示している形容詞であるので、「口が旨い」が否定的な意味で使われているのは、反語的といえるだろう。

次に、ドイツ語の“Mund”を構成要素とするイディオムについてみたように、日本語の「口」を構成要素とするイディオムについても、4つの観点から、分類することが可能であろう。すなわち、身体器官としての「口」、つまり空気や食物を身体内に取り込むための器官（a-1）、味覚に関わる機能（a-2）、発言行為に関わる機能（b-1）、発言行為による言語的産物（b-2）という4つの意味論的観点から、82のイディオム表現を分類すると、次のようになる。（a-1）に属するものが14（17%）、（a-2）に属するものが4（5%）、（b-1）に分類できるものが37（45%）、そして（b-2）が27（33%）となっている。

イディオム表現の主構成要素となっている「口」が字義通りに「口」を指示しているのか、換喩的に用いられているのか、あるいは暗喩的に用いられているのか、という点から、分類することができる。たとえば「口の端にかかる」（38）という表現に出てくる「口」は、換喩的に用いられている。「口あんぐり」や「口が腐っても」における「口」は、字義通りに「口」を意味している。「口」が発言行為や発言を意味している場合は、暗喩的であると考えられる。つまり、上述した4つの意味論的観点からの分類における（a-1）、（a-2）の2つに分類できるものは、字義通りの意味で用いられていることになる。そして（b-1）、（b-2）に属する表現に出現する「口」は、暗喩的に用いられていると考えることができる。

### 2.2.3 語用論的分類

1) 表現が意味している事態が肯定的に評価される、あるいは肯定的な価値評価で使われる（+）、2) イディオム表現が意味している事態が否定的に評価される、あるいは否定的な価値評価で使われる（-）、3) そのいずれでもなく中立的（±）という語用論的観点から分類すると、

次のようになる。プラス評価を伴う表現が8 (10%)、マイナス評価を伴う表現が55 (67%)、どちらでもなく中立的な評価、つまり状況や対象によってプラスにもマイナスにもなり得る表現が19 (23%) という数になった。

### 3 分類に基づく考察

日本語の「口」を構成要素とするイディオム表現についていうと、プラス評価のうち、発言行為に関するものは「口が堅い」(9)だけである。発言そのものがプラスに評価されているものは、たとえば「口が掛かる」(8)、「口を掛ける」(50)、「口を利く」(51)、「口を極める」(53)、「口を添える」(54)の5つである。プラス評価されているものは全部で8 (10%) であり、その中でも発言行為、発言そのものが肯定的に評価されているものは全部で6 (7%) であり、きわめて少ない。

ドイツ語についてはどうか。プラス評価されている表現は全部で14 (23%) であり、そのうち発言行為および発言に関する表現両者を合わせた数は10 (16%) である。日本語もドイツ語も数自体はそれほど多いとはいえないが、ドイツ語の方が、発言行為および発言をプラスに評価している表現が日本語の2倍以上存在している。

発言行為に関するものは“den Mund aufmachen”(8)、“den Mund halten”(9)、“reinen Mund halten”(11)、“ein gutes/flinkes Mundwerk haben”(48)という4つの表現である。これらの表現を見ると、発言行為が肯定的に評価されているといっても、半分は発言しないことがプラスに評価されている。“Reden ist Silber, Schweigen ist Gold”(弁舌は銀なり、沈黙は金なり)という教訓が反映しているかのようである。その点では、日本語の場合と同じである。日本語はまさしく「口が堅い」と発言しないことをプラスに評価している。他方、ドイツ語には発言行為そのものをプラスに評価しているものがあるが、日本語にはないということが目に付く。

逆に日本語に関してマイナス評価を伴う表現を見ると、全体で55 (67%) という数である。内訳をみると、発言行為、発言に関するものがそれぞれ24 (29%)、18 (22%) と多数存在する。両者あわせて42 (51%) であり、「口」を構成要素とするイディオム表現82の中の半数を越えている。ドイツ語の方は、全体で33 (54%) である。その内訳を見ると、発言行為、発言に関するものがそれぞれ10 (16%)、16 (26%) であり、両者合わせて26 (43%) となる。割合から見ると、日本語の方が、マイナス評価をしている表現が12%ほど多いということになる。マイナス評価を伴う表現55のうち、発言行為が24 (44%) であり、ドイツ語と比較すると(ドイツ語は10 (30%))、日本語においては発言行為そのものをマイナス評価している表現が多いといえそうである。

身体器官としての口 (a-1)、味覚に関する機能 (a-2) については、日独両言語とも、ほぼ同じ数のイディオム表現が存在する。両言語とも発言行為 (b-1) と、発言行為の結果としての発

言 (b-2) に関するイディオム表現が半数以上を占めている。このことは、「口」が持っているいわば生命維持に必要な空気、栄養物の取り入れ口としての機能よりも、第二次的機能である発言行為に関する機能が重視されていると見なすことができる<sup>3)</sup>。舌に関するイディオム表現についても同様であった (Ueda 2001)。舌に関するイディオム表現と異なるのは、発言行為、発言そのものを否定的に評価しているイディオム表現が半数以上を占めているということである。このことは、予想外の結果であった。

以上の結果をまとめると、日独両言語における“Mund”と「口」に関するイディオム表現に関するかぎりでは、発言行為、発話に関する表現をマイナスに評価しているものが多い。ドイツ語と比較すると日本語の方が、より多く発言行為をマイナス評価している表現が多い。逆にドイツ語の方は、日本語よりも発言行為による言語的産出物としての発言そのものを否定的に捉えている表現が日本語よりもいくらか多いということがいえる (ドイツ語は $16 \div 33 = 48\%$ 、日本語は $18 \div 55 = 33\%$ )。状況と対象によって、肯定的にも否定的にも使われる表現は、日独両言語において同じ割合である (ドイツ語は $14 \div 61 = 23\%$ 、日本語は $19 \div 82 = 23\%$ )。

#### 4 イディオム学習・教授法の視点から

まずドイツ語イディオム表現を理解するという観点から見ていこう。

“von Mund zu Mund gehen” (次から次へと話が広まっていく) という表現は、「口移し」という日本語の表現を想起させるが、使用域が異なる。日本語の「口移し」は、主として母子の間に適用される表現であると考えられ、イディオム表現ではない。または「口伝」、「口授」ということを意味する。この場合は、直に伝えるという意味である。ドイツ語の表現は、人間の身体の一部である“Mund”を人間の意味で使用している。つまり換喩的表現である。ドイツ語の表現を理解するにおいては、構成要素としての“Mund”が字義通りの意味で用いられているのか、比喩 (換喩、暗喩) 的に用いられているのかにまず留意することが必要だということである。もちろんイディオム表現としての意味は、比喩的である場合が多い。

ドイツ語の表現が日本語の表現と重なっている場合は、基本的意味の理解においてほとんど問題はないであろう。たとえば、“mit dem Mund vorneweg sein” (口が先にある→やかましい) というドイツ語のイディオムに、表現と意味内容両面でほぼ対応しているのは「口から先に生まれる」である。そして表現に伴っている価値判断の点においてもマイナスに評価されるという点で、同じである。“den Mund halten” (口を閉ざす)、“den Mund aufmachen” (口を開く)、“den Mund stopfen” (口を塞ぐ)、“den großen Mund führen/haben” (大口を叩く)、これらの表現は、ほとんど重なり合っている。従って、理解においてそれほど問題はないといえるだろう。

ただし、表現と意味内容がほぼ重なり合っているにもかかわらず、表現に伴う価値判断、表現の使用域の差といった点には十分に留意する必要がある。たとえば“jemandem das Wort im Mund herumdrehen”

(誰かの言葉を口の中でひね回す→誰かの発言をねじ曲げる) という表現を日本語母語話者は、「舌頭に千転する (繰り返し何度も口ずさむ→十分に推敲する)」という方向で理解する可能性が大きい。その時にはドイツ語の表現が持っている否定的な意味が全く逆になってしまう。その意味では、価値判断に関して両者は「偽の友だち」関係にあることになる。

ドイツ語の“einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen” (不満足、不機嫌な顔をする) は日本語に直訳すると「口をゆがめる」ということになるが、その日本語の表情は苦痛を表現する。一見「偽の友だち」関係にある表現であるといいたくなるが、日本語の「口をゆがめる」は、イディオム表現、つまりキネグラムではない。従って「偽の友だち」関係にあるとは言えない。ドイツ語の“einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen”という表現に対応する日本語の表現は、「口を尖らす」である。つまり、同じ口の形を変化させるといっても、その変化のさせ方がドイツ語と日本語は異なるのである。

本当の意味での「偽の友だち」関係にあるといえるのが“sich den Mund/das Maul wischen können” (口を拭うことができる：何も得ない結果となる) と「口を拭う」である。ドイツ語の表現が持っている意味は、説明的に与えた日本語訳の通りだが、直訳して「口を拭う」とであると理解すると、意味を取り違えることになってしまう。日本語の「口を拭う」は「悪いことややましいことをしながら、何食わぬ顔をする」(『成語林』332頁) という意味の表現である。“reinen Mund halten” (清潔な口を保つ) と「綺麗な口をきく」も「偽の友だち」関係にある表現である。ドイツ語の表現は、「人を裏切ったり、密告したり、悪口を言ったりしない」という意味である。他方日本語の「綺麗な口をきく」は、「自分には偽りやごまかしがないかのような、体裁のよいことを言う」(『成語林』306頁) である。

“sich den Mund/das Maul verbrennen” (口をやけどする：不用意な発言で害を被る) は、日本語においては、イディオムというよりはことわざで「口は禍の門」という表現に思い至るならば、理解は正しく行われることになるだろう。

次に産出の面から考えていくことにしよう。

「口あんぐり」や「大きな口をきく」といったほぼ重なり合っている表現は、日本語からドイツ語にほぼ直訳的に表現しても、“mit offenem Mund dastehen”と“einen großen Mund führen/haben”という、ドイツ語における対応表現にいたる可能性は大きいといえる。つまり日本語においては「口」、ドイツ語においては“Mund”を構成要素とするイディオム表現間の対応付けを学習することによって、適切な表現が産出できることになるだろう。

しかしながら、日本語では「口」を構成要素とするイディオム表現であるが、ドイツ語で「口」以外の身体部位名を主構成要素とするイディオム表現が対応している場合もある。たとえば、日本語では「口が旨い」と表現するが、ドイツ語では“Mund”ではなく、“Zunge”を構成要素とする“eine beredte Zunge haben”というイディオム表現が対応している。「口」に対応する“Mund”を構成

要素とする“nicht auf den Mund gefallen sein”という表現を思いつくのは、かなり難しい。

「口が旨い」の「口」を“Zunge”におきかえて“eine beredte Zunge haben”に到達するのと同じように、日本語では「口が重い」と表現するからといって、口を“Zunge”に置きかえて、“eine schwere Zunge haben”と表現すると、日本語の表現が持っている意味とは違う意味で理解されてしまうことになる。ドイツ語の表現は、アルコールで舌が重い、つまり「ろれつが回らない」という意味なのである。

日本語のイディオム表現「歯に衣着せぬ」には、ドイツ語の“kein Blatt vor den Mund nehmen”（口の前に葉を取らない）という表現を対応させるということになるだろう。口の一部である「歯」から口全体に視点を転ずることはそれほど難しくはなく、「歯」を“Mund”、「衣」を“Blatt”と置きかえるならば、ドイツ語の表現にほぼ到達することができるかもしれない。しかし、注意しなければならないのは、ドイツ語と日本語の表現に伴っている価値評価が、逆になっているということである。ドイツ語の表現は、日本語の表現とは異なって、プラス評価を伴っているのである。直言することは、ドイツ語においては勧められるべきことなのである。反対に、日本語においては直言することは、やむを得ない場合にすることであり、通常は勧められるべきこととは捉えられてはいない。むしろ控えるべきことなのである。

## 5 おわりに

日本語でもドイツ語でも驚いたとき、呆気にとられたときは「口をあぐり」開ける（“den Mund aufreißen”）ようであるが、ドイツ語圏の人々は“Mund und Nase aufreißen”（4）という表現が示しているように、さらに鼻の穴も広げるようである。顔の表情全体は同一であろうが、どこに焦点を当てて言語的に表現するかという言語化における違いであるといえる。

「舌」に関するイディオム表現においても観察されたことだが、「口」に関しても饒舌、おしゃべりをネガティブにとらえている表現が多い。他方、全く沈黙してしまうことについても、否定的にとらえている表現がいくつかある。そもそも、日本語においては、発言行為をどのようにあるべきだと捉えているのだろうか。「舌」と「口」に関するイディオム表現を観察する限りでは、結局、儒教の精神に沿っているともいえるが、中庸が一番好ましいということのようである。ドイツ語においては、どちらかという、発言行為をポジティブに評価している表現が、日本語に比較すると、多いということが確認できた。

最後に「口」に関するウィットを2つ掲げて論述を終えることにしたい。いずれも歯医者対象となっているが、歯は口の中にあるので、「口」に関する本論で取り上げてもそれほど場違いではないだろう<sup>4)</sup>。

Eben jener Mann im weißen Kittel, der **von der Hand im Mund lebt**, ruft beim Gerichtsvollzieher an. “Hat der Patient das von mir gelieferte Gebiss nun endlich bezahlt?”



“Tut mir leid, Doktor. Er hat die Zahlung schroff abgelehnt und dabei Ihre Zähne gefletcht.”  
(Hoppe/Krüßmann (Hrsg.) 2001: 332) (その日暮らしをしている 歯医者、強制執行人に電話する。「例の患者は、入れ歯の代金を支払ったかな?」「残念ながら、先生、例の患者は支払いを断固拒否して、あなたが作った歯をむき出しにして噛みついてきましたよ。)

“Herr Doktor, wieviel soll das neue Gebiss denn kosten?” “Etwa 1500 Euro, aber dann können Sie auch wieder wunderbar beißen!” “Das nützt mir nichts. Wenn ich bezahlt habe, **habe ich nichts mehr zu beißen!.**” (Nikol 2002: 152) (「ところで、先生、新しい入れ歯の代金はいくらですか?」「およそ1500ユーロですよ。これで何でも食べることができるようになりますよ!」「私にとっては役にたつことはなさそうですね。代金を支払った後、何も口にすることもはないでしょうから!」)

## 6 注 釈

- 1) “mundtot” は、歴史的にいうならば、“Mund”から派生された形容詞ではない。しかし、フリーデリヒの『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)には、“Mund”の項にあげられている。民間語源による誤った理解ではあるが、多くの現代ドイツ人は“Mund”と関連づけて理解しているのであろう。
- 2) ドイツ語のイディオム表現に伴う価値評価に関する判断は、広島大学文学部ドイツ語学・ドイツ文学専攻におけるかつての同僚U・ヤーンケ (Dr. Uwe Jahnke) 氏と、現在 (2002年12月) 時点における広島大学文学部における同僚であるB・エーリンガー (Dr. Bernhard Öhlinger) 氏に行っていた。助力に感謝する次第である。両氏による解答結果は、14の表現に関して、異なった価値評価を下している。ヤーンケ氏は、ドイツ連邦共和国ニーダー・ザクセン州の生まれで、現在も同州で生活している。エーリンガー氏は、オーストリア共和国、ザルツブルク出身である。個人的な語感の違い、使用状況に関する解釈の違いもあるが、ドイツとオーストリアのドイツ語の違いを反映しているとも解釈できるのではなかろうか。“den Mund halten”については、ヤーンケ氏はポジティブな評価を下し、エーリンガー氏はネガティブな評価を下している。その他については、(+) あるいは (-) に対して (±) という判断になっており、極端に異なっているとはいえない。ともあれ発音や語彙についてだけでなく、イディオム表現についても、ドイツ連邦共和国とオーストリアにおける国家変種の枠組みにおける研究の展開が望まれる。
- 3) 他の箇所 (Ueda 2001) において、「口」を味覚器官として捉えている小林 (小林 2000) の考えに異議を唱えたが、ここでも同様の異議を唱えることができる。日独の「口」に関するイディオム表現を見る限りでは、「口」が持っている第二次的機能が優勢であり、「口」に味覚機能を代表させるのは、妥当ではないといえる。「口」はむしろ発話器官としての機能として捉

えるべきといえよう。

- 4) 2番目のウィットに直接“Mund”という語は出現していない。しかし“nichts zu beißen haben”の日本語訳として「口にするものが何もない」というのが自然であろうと判断し、ここで提示した。

## 7 参考文献

- Gambusch (Hrsg.) 1991:** Die 300 besten Schüler-Witze. München: Droemersch Verlagshaus Th. Knaur Nachf.
- Nikol 2002:** Goerg Friedrich Nikol, 666 Witze. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- DUDEN 1992:** DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Gunther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.
- Friederich 1966:** Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.
- 小林 2000:** 小林和世「日西対照研究—身体部各位名称を用いた表現を資料として—」、『ニダバ』(西日本言語学会) 第29号、58-67頁。
- 尾上兼英編『成語林』、旺文社、1992年。
- Ueda 2001:** 植田康成「日独イディオム比較対照—“Zunge”と「舌」を構成要素とするイディオム表現—」、『ニダバ』(西日本言語学会) 第30号、94-103頁。

### 【資料1】ドイツ語における“Mund”を構成要素とするイディオム

1. den Mund nicht aufbekommen/aufkriegen: sich nicht trauen, etwas zu sagen (－)  
(口を開けない：何かを言う自信がない)
2. einen großen Mund haben/führen: vorlaut sein, angeben (－)  
(大きな口を持っている：うるさい、ほらを吹く)
3. du hast wohl deinen Mund zu Hause gelassen: du bist aber sehr schweigsam (－)  
(家に口を置き忘れてきたのだろう：とても口数が少ないではないか)
4. Mund und Nase aufreißen/aufsperrn: sehr überrascht sein (±)  
(口と鼻を広げる：非常に驚いている)
5. den Mund /das Maul aufsperrn: sehr erstaunt sein (±)  
(口を開く：非常に驚いている)
6. den Mund/das Maul aufreißen/voll nehmen: aufschneiden, prahlen, großtun (－)  
(口を開く、口を一杯にする：自慢する、大きく出る)

7. den Mund/das Maul auf dem rechten Fleck haben: schlagfertig, beredt sein (+)  
(口を右側に持っている: 機転が利く、ことば巧みである)
8. den Mund (das Maul, die Fresse o.ä.) aufmachen/auftun: etwas sagen, reden (+)  
(口を開く: 何かを言う、話す)
9. den Mund (das Maul, die Fresse o.ä.) halten: schweigen, still sein (+)  
(口を閉ざす: 沈黙する、静かにしている)
10. den Mund [zu] voll nehmen: [zu] viel versprechen, angeben (-)  
(口を一杯にする: 約束しすぎる、ほらを吹く)
11. reinen Mund halten: nichts verraten (+)  
(口を清く保つ: 何ももらさない)
12. einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen: ein unzufriedenes, beleidigtes Gesicht machen (-)  
(口をゆがめる: 不満足、不機嫌な顔をする)
13. sich den Mund fusselig/fußlig reden: durch Reden vergeblich versuchen, jmdn. zu etwas zu bewegen, jmdm. etwas einprägen (-)  
(口がすり切れるほど話す: だれかの心を動かそうと懸命に話すが、うまくいかない: 口を酸っぱくして言う)
14. sich den Mund/das Maul verbrennen: sich durch unbedachtes Reden schaden (-)  
(口をやけどする: 不用意な話で害を被る)
15. sich den Mund/das Maul wischen können: leer ausgehen (±)  
(口を拭うことができる: 何も得ない結果となる)
16. jmdm. den Mund öffnen: jmdn. zum Reden bringen (±)  
(だれかの口を開く: 話させる: 口を開かせる)
17. jmdm. den Mund/das Maul verbieten: jmdm. untersagen, sich zu äußern (-)  
(だれかの口を禁じる: だれかに話すことを禁じる)
18. jmdm. den Mund wässrig machen: jmdm. Appetit, Lust auf etwas machen (+)  
(だれかの口を水っぽくする: 食欲を起こさせる、何かをしようという気にさせる)
19. jmdm. den Mund/das Maul stoppen: jmdn. zum Schweigen bringen (-)  
(だれかの口を塞ぐ: だれかを黙らせる)
20. an jmds. Mund hängen: jmdm. gebannt zuhören (+)  
(だれかの口におら下がる: だれかの言うことを魅入られたように聞き入る)
21. nicht auf den Mund gefallen sein: schlagfertig sein, gut reden können (+)  
(口に躓いて倒れていない: 機転が利く、よく話すことができる)
22. wie aus einem Munde: gleichzeitig, alle zugleich sprechend (±)

- (一つの口からのように：みなが同時に話す)
23. **in aller Munde sein: sehr bekannt, schnell verbreitet, im Gespräch sein** (±)  
(すべての人の口の中にある：非常に知られている、早く広まって話題になっている)
24. **etwas [nicht] in den Mund nehmen: etwas [nicht] aussprechen** (±)  
(何かを口の中にとる：何かを言明する)
25. **jmdm. etwas in den Mund legen: jmdm. auf eine bestimmte Aussage hinlenken** (－)  
(だれかの口に何かをおく：特定のことを言うようにだれかを誘導する)
26. **etwas ständig/dauernd/viel im Munde führen: über etwas oft reden, ein Wort häufig gebrauchen** (±)  
(何かを常に／たえず／多く口にのぼせる：何かについてしばしば話す、ある語をしばしば用いる)
27. **mit dem Mund vorneweg sein: vorlaut sein** (－)  
(口が先にある：うるさい、やかましい)
28. **jmdm. nach dem Munde reden: jmdm. immer zustimmen, das sagen, was der andere gern hören will** (－)  
(だれかの口にならって話す：ある人にいつでも同意する、相手の聞きたいと思うことを言う)
29. **jmdm. über den Mund fahren: jmdm. das Wort abschneiden; jmdm. scharf antworten** (－)  
(だれかの口の上を通る：だれかのことばを切断する、だれかにきつく答える)
30. **von Mund zu Mund gehen: durch Weitererzählen [schnell] verbreitet werden** (±)  
(口から口へいく：次から次へと話すことによって広まる)
31. **sich etwas am/vom Munde absparen: unter Entbehrungen sparen** (S. 24) (±)  
(口から節約する：必要なものを儉約する)
32. **sich jeden/den letzten Bissen am/vom Munde absparen: unter Entbehrungen sparen, sparsam leben** (S. 24) (±)  
(最後のひとくちを口から節約する：必要なものを節約して生活する)
33. **Ausdrücke im Munde führen: Ausdrücke gebrauchen/Ausdrücke an sich haben: sich derb ausdrücken, Schimpfwörter gebrauchen** (S. 70) (－)  
(表現を口にのぼせる：あらっぽく表現する、ののしりことばを用いる)
34. **aus berufenem Munde: von kompetenter Seite** (S. 99) (+)  
(しかるべき口から：有能な側から)
35. **jmdm. die Bissen in den Mund/im Mund zählen: jmdm. aus Sparsamkeit das Essen nicht gönnen** (S. 111) (－)  
(口に入れるたびに数える：節約するため、だれかに食事を恵まない)
36. **kein Blatt vor den Mund nehmen: offen seine Meinung sagen** (S. 113) (+)  
(口の前に葉をとらない：意見をはっきりという)

37. jmdm. Brei um den Mund schmieren: jmdm. schmeicheln (S. 126) (－)  
(だれかの口の周りに粥を塗る: だれかにお世辞を言う)
38. von der Hand in den Mund leben: die Einnahmen sofort für Lebensbedürfnisse wieder ausgeben (S. 306) (－)  
(手から口へと入れる生活をする: 収入をただちに生活の必要のために支出する)
39. wes das Herz voll ist, des geht der Mund über: wenn jmd. von etwas besonders begeistert ist, besonders bewegt ist, dann muss er einfach darüber sprechen (S. 327) (+)  
(心を一杯にしているものは、口に移行していく: うれしいことはつい話さざるをえない)
40. jmdm. Honig um den Mund schmieren: jmdm. schmeicheln (S. 348) (－)  
(だれかの口の周りに蜂蜜を塗る: だれかにお世辞を言う)
41. mit einem goldenen/silbernen Löffel im Mund geboren sein: Kind reicher Eltern sein, Glück in allen Dingen haben (S.461) (+)  
(金/銀のスプーンをくわえて生まれた: 金持ちの両親の子供である)
42. Morgenstunde hat Gold im Munde: am Morgen lässt es sich gut arbeiten; wer früh mit der Arbeit anfängt, erreicht viel. (S.494) (+)  
(朝の時間は口に金を持っている: 朝には仕事がはかどる)
43. jmdm. läuft das Wasser im Munde zusammen: jmdm. bekommt großen Appetit auf etwas, großes Verlangen nach etwas (S. 783) (+)  
(口に涎が溜まる: 何かを大いに食べたい、何かを大いにほしがる)
44. jmdm. das Wort im Mund herumdrehen: jmds. Aussage ins Gegenteil verkehren (S. 816) (－)  
(だれかのことばを口の中でひね回す: だれかの発言を反対にしてしまう)
45. jmdm. das Wort aus dem Mund/von der Zunge nehmen: genau das sagen, was jmd. gerade selbst sagen wollte (S. 816) (±)  
(だれかの口からことばをとる: だれかが言おうと思っていたことを言う)
46. jmds. Mundwerk steht nicht still: jmd. redet ununterbrochen (－)  
(口が静かにしていない: 絶えずしゃべる)
47. ein böses/lockeres/loses/frech o.ä. Mundwerk haben: gehässig/vorlaut/frech o.ä. reden (－)  
(意地の悪い/ゆるやかな/ゆるんだ/生意気な口を持っている: 憎まれ口を聞く/生意気なことを言う…)
48. ein gutes/flinkes Mundwerk haben: sehr gewandt reden (+)  
(よい/すばやい口を持っている: 非常に雄弁である)
49. ein großes Mundwerk haben: großsprecherisch reden (－)  
(大きな口を持っている: 大きなことを言う)

- “Mund”を構成要素とするイディオム (Friederich 1966: 232-236)
50. den Mund aufreißen = das Maul aufreißen (wie ein Scheunentor) : 1) **derb**,  
( wie ein Scheunentor) **zornig, reden**, 2) **außerordentlich prahlen** (－)  
(納屋の門のように口を開く：ぞんざいに話す、大自慢話をする)
51. den Mund aufreißen = das Maul aufreißen über j-n: **schlecht reden über j-n**. (－)  
über j-n (だれかについて口を開く：だれかについて悪いことを言う)
52. s. den Mund zer- = s. das Maul zerreißen: **hässlich reden** (über j-n.) (－)  
reißen (口を裂く：意地悪なことを話す)
53. ein ungewaschener = ein ungewaschenes Maul = ein grobes Mundwerk haben (－)  
Mund (洗っていない口を持っている：粗雑な口をきく)
54. j-m eins (od. eine) j-m e-n Schlag auf den Mund geben (－)  
auf den Mund geben (だれかの口の上にひとつあげる：だれかの口の上に一発見舞う)
55. eins (od. eine) auf e-n Schlag auf den Mund bekommen (－)  
den Mund bekommen  
(od. kriegen) (口の上にひとつもらう：口の上に一発見舞われる)
56. etw. aus j-s Mund etw. von j-m hören, erfahren (±)  
(zum erstenmal)  
hören (何かをだれかの口から初めて聞く：初めて聞く)
57. (ein Wort) (nicht) in ein (abscheuliches) Wort (nicht) benutzen (+)  
den Mund nehmen (口に入れたい：汚いことばを使わない)
58. j-m etw. in den Mund etw. so darlegen, dass man es verstehen muss (－)  
schmieren (だれかの口の中に何かを塗る：いやでも解るようにかみ砕いてやる)
59. mit offenem Mund = den Mund (od. Mund u. Nase) aufsperrern (±)  
dastehen (口を開けて立っている：非常にびっくりしている：口あんぐり)
60. j-m etw. = j-m etw. schmackhaft machen: j-n so beeinflussen, dass er  
mundgerecht etw. angenehm, wünschenswert findet (S. 729) (－)  
machen (だれかの口に合うようにしてやる：望ましいと思うようにし向ける)
61. j-n mundtot machen machen, dass j-s Worte nicht verbreitet werden (－)  
(だれかの口を死んだ状態にする：だれかの言葉が広がらないようにする、口を封じる)

意味論的分類：

**a-1** : 4, 5, 12, 15, 31, 32, 35, 38, 41, 42, 43, 54, 55, 59 [14]

**a-2** : 58, 60 [2]

**b-1** : 1, 2, 3, 6, 8, 9, 11, 13, 16, 17, 19, 23, 24, 27, 46, 48, 61 [17]

b-2 : 7, 10, 14, 18, 20, 21, 22, 25, 26, 28, 29, 30, 33, 34, 36, 37, 39, 40, 44, 45, 47, 49, 50, 51, 52, 53, 56,  
57 [28]

## 【資料2】日本語における「口」を構成要素とするイディオム

1. 口あんぐり：何かにあきれたり、びっくりしたりして、思わず口を開けるさま (±)
2. 口裏を合わせる：口を合わせる (－)
3. 口が旨い：口が上手： (－)
4. 口がうるさい：口うるさい (－)
5. 口が多い：口数が多い (－)
6. 口が奢る：口が肥える、舌が肥える (－)
7. 口が重い：口が重たい (－)
8. 口が掛かる：誘いがかかる (+)
9. 口が堅い：秘密などを軽々しく人に話さない (+)
10. 口が軽い：おしゃべりであること (－)
11. 口が腐っても：口が裂けても (+)
12. 口が過ぎる：遠慮しなければならないことまでいう (－)
13. 口が酸っぱくなる：同じことを何度もくり返している (－)
14. 口が滑る：口を滑らす (－)
15. 口数を利かない：ことば数が少ない (±)
16. 口が達者：よくしゃべること (－)
17. 口が干上がる：暮らしがたたなくなる (－)
18. 口が減らない：ああ言えばこう、こう言えばああと、平気で言い返す (－)
19. 口が曲がる：そういうことは言うべきでないということ (－)
20. 口から先に生まれる：非常におしゃべりな者を、多少のからかいとあなどりをこめていう (－)
21. 口が悪い：人に対して、遠慮なくずけずけとものを言う (－)
22. 口車に乗せる：上手に言いくるめて、相手をだます (－)
23. 口車に乗る：相手の巧みな言いまわしによって、だまされる (－)
24. 口三味線に乗せる：口先だけで相手をごまかす (－)
25. 口でけなして心で褒める：口では悪く言うが、心の中では高く評価する (±)
26. 口と腹とは違う：口で言うことと心の中で考えていることとは別である (－)
27. 口に合う：食べ物や料理の方法が、食べる人の好みに一致する (+)
28. 口に栄耀(えよう)身に奢り：ぜいたくの限りを尽くすこと (－)

29. 口に風邪を引かす：せっかく話をして、相手にわかってもらえず、むだになるたとえ  
(-)
30. 口にする：話題にする、飲み食いをする (±)
31. 口に出す：心で思っていることをことばにだして言う (±)
32. 口に使われる：ただ食べていくために、あくせくと働く (-)
33. 口に上せる：話題にする (±)
34. 口に糊する：やっと暮らしを立てること (-)
35. 口に乗る：人々のうわさになる、甘言にだまされて言うがままになる (-)
36. 口に任せる：深く考えないで、思うままにものを言う (-)
37. 口の下から：話すそばから (-)
38. 口の端に掛かる：人々のうわさに上って、話の種にされる (-)
39. 口の端に掛ける：うわさをする、話題にする (-)
40. 口の端に上る：話題になる、人の話にしばしば出てくる (-)
41. 口は重宝：口は便利なもので、都合のいいように言って、とりつくろうこともできるということ (-)
42. 口幅広し：口幅ったい：遠慮のない思いきった口のきき方である (-)
43. 口火を切る：一番先にものを始める (±)
44. 口弁慶：口は達者で力強いことを言うけれども、実際の行動は全くだめなこと (-)
45. 口ほどに手は動かさず：口先だけで実行しない (-)
46. 口程にもない：口程もない (-)
47. 口(も)八丁手(も)八丁：しゃべるのも仕事をするのも、人一倍達者であること (±)
48. 口を合わせる：相手の言うことに話を合わせる (-)
49. 口を掩う：忍び笑いをする (-)
50. 口を掛ける：誘う、声を掛ける (+)
51. 口を利く：物事がうまく運ぶように仲をとりもつ (+)
52. 口を切る：最初に発言する (±)
53. 口を極める：言葉を尽くす (+)
54. 口を添える：口添えする (+)
55. 口を揃える：人々が同時に同じことを言う (±)
56. 口を出す：差し出口をする (-)
57. 口を叩く：よくしゃべる (-)
58. 口を衝いて出る：次から次へことばがすらすら出てくる (±)



59. 口を噤む：口を閉じてものを言わない (±)  
 60. 口を慎む：慎重にもの言う (－)  
 61. 口を尖らす：唇を尖らす (－)  
 62. 口を閉ざす：沈黙を守る (－)  
 63. 口を直す：口直しをする (－)  
 64. 口を濁す：言葉を濁す (－)  
 65. 口を拭う：悪いことややましいことをしながら、何食わぬ顔をする (－)  
 66. 口を濡らす：細々と生活する (－)  
 67. 口を挟む：話に割り込む (－)  
 68. 口を開く：ものを言う (±)  
 69. 口を塞ぐ：口を封ずる (－)  
 70. 口を割る：泥を吐く：自白する (±)

語中に「口」を含むイディオム表現

71. 開いた口が塞がらない：相手の態度や行為にあきれかえったり、あっけにとられたりして、ものも言えない (－)  
 72. あたら口に風を入れる：せっかく言い出したことがむだになる (－)  
 73. 言う口の下から：言うとすぐに (±)  
 74. 狼の口あいたよう：裂けめが大きいさま (±)  
 75. 大きな口をきく：大口をたたく：えらそうなことを言う (－)  
 76. 綺麗な口をきく：自分には偽りやごまかしがないかのような、体裁のよいことを言う (－)  
 77. 心と口と違う：口ではいいことを言うが、心では悪いことを考えている (－)  
 78. 序の口：物事がまだはじまったばかりであること (±)  
 79. 手八丁口八丁：することも話すことも非常に達者であること (±)  
 80. 立派な口をきく：口先では偉そうなことを言う (－)  
 81. 口頭の交わり：口先だけで誠実さのない交際 (－)  
 82. 口吻を漏らす：それとなく気持ちの一端を口に出す (±)

意味論的分類

**a-1** : 1, 11, 17, 19, 20, 32, 34, 49, 61, 65, 66, 71, 74, 78 [14]

**a-2** : 6, 27, 28, 63 [4]

**b-1** : 4, 5, 7, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 29, 30, 31, 33, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 43, 45, 46, 47, 52, 56, 57, 58, 59, 60, 62, 67, 68, 69, 70, 73 [37]

**b-2** : 2, 3, 8, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 35, 42, 44, 48, 50, 51, 53, 54, 55, 64, 72, 75, 76, 77, 79, 80, 81, 82 [27]

## Kontrastive Phraseologie: Deutsch-Japanisch

— idiomatische Wendungen mit der Hauptkomponente

“Mund” im Deutschen und “Kuchi” im Japanischen —

Yasunari UEDA

In der vorliegenden Arbeit werden idiomatische Wendungen mit Hauptkomponenten “Mund” im Deutschen und “Kuchi” im Japanischen zunächst in Bezug auf die morpho-syntaktischen, semantischen und pragmatischen Eigenschaften kontrastiv analysiert, um dann einige sprachdidaktische Überlegungen anzustellen. Dabei geht es um die Frage, welche Probleme sich beim Verstehen und Produzieren von deutschen Wendungen für Deutsch lernende Japanischmuttersprachler ergeben. Die Daten für das Deutsche werden aus den beiden Lexika “Moderne Deutsche Idiomatik” (Friederich 1966) und “Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten” (DUDEN 1992), und die Daten für das Japanische aus dem Lexikon “Seigorin” (Ogami 1992) gesammelt.

Die deutsche Wendung “von Mund zu Mund gehen” kann z. B. sehr leicht missverstanden werden. Die deutsche Wendung kann man mit der Wendung “Kuchi-Utsushi” ins Japanische übersetzen, wobei diese japanische Wendung jedoch auf einen ganz anderen Sachbereich bezogen gebraucht wird. Bei der deutschen Wendung wird normalerweise eine sprachliche Botschaft “von Mund zu Mund” weitergegeben, bei der japanischen geht es dagegen um die Intimität zwischen Mutter und Baby.

Beim Produzieren muss man die Tatsache berücksichtigen, dass der Deutsch lernende Japanischmuttersprachler zunächst im Japanischen denkt und dann diesen Gedanken im Deutschen zu formulieren versucht. Dabei ist es denkbar, dass man eine wörtliche Übersetzung produziert, die zwar im Deutschen verstehbar ist, aber eine andere Bedeutung hat als die zuerst gedachte japanische Wendung. “Kuchi ga umai” bedeutet im Japanischen, dass man gut und eloquent redet. Diese Bedeutung drückt man im Deutschen nicht mit einer Wendung mit der Hauptkomponente “Mund” aus, sondern “Zunge”, nämlich mit der Wendung “eine beredete Zunge haben”. Dagegen bedeutet “Kuchi ga omoi” im Japanischen, dass man nur selten redet. Analog wie bei der Wendung “Kuchi ga umai = eine beredete Zunge haben” könnte man sich im Deutschen mit “eine schwere Zunge haben” (schwer=omoi) ausdrücken. Diese Wendung “eine schwere Zunge haben” ist zwar im Deutschen verstehbar, hat jedoch eine andere Bedeutung als die ursprünglich gemeinte.

Wie bei den idiomatischen Wendungen mit der Hauptkomponente “Zunge” im Deutschen und mit “Shita” im Japanischen (Ueda 2001) werden die meisten Wendungen in Bezug auf die Sprechhandlung

verwendet. Diese Sprechhandlung wird im Deutschen meistens positiv beurteilt, dagegen negativ im Japanischen. Dies könnte wohl die allgemeine unterschiedliche Einstellung dem Reden oder der Eloquenz gegenüber in der jeweiligen Sprachkultur widerspiegeln.